

2018.9.25

山口きらめき財団助成金事業  
防災ワークショップ（山陽小野田市出合地区および近隣）  
レポート（ver1.0）

一般社団法人やまぐち GIS ひろば  
事務局) 弘中 淳一



**【開催要項】**（参加者）40名（うち小中学生8名）、待機5名（計45名）

- ① 日時：2018/ 8/ 18(土) 9:00～15:00
- ② 場所：山陽小野田市厚狭公民館
- ③ 主催：一般社団法人やまぐち GIS ひろば
- ④ 後援：山陽小野田市、山陽小野田市立山口東京理科大学
- ⑤ 協力：山陽小野田市防災士 有志

## 1.オリエンテーション

【①開会あいさつ】（一社）やまぐち GIS ひろば理事長 三浦房紀



【②地域の危険箇所について（山陽小野田地区）】山陽小野田市防災士有志 中込誠氏



【③本日のプログラム】（一社）やまぐち GIS ひろば事務局 ※写真略

## 2.街歩き（危険箇所の情報収集）

参加者 40 名を 1 グループ 10 名に分けて、計 4 地区を街歩き。  
危険箇所の記録（&記憶）を実施した。



マンホール、側溝の確認



道路側へ傾いている電柱



2010 年の浸水被災時には、  
ここまで浸かった（住民談）



根太郎荒神社  
「大昔は沼地だった（1841）」



ブロック塀



2010 年の浸水被災時には、  
ここまで浸かった（防災エキスパート談）

### 3.ハザードマップ作り（大判地図、GIS）

街歩きの状況を大判地図の危険箇所にコメント付きの付箋紙を張るとともに、GISにも記録した。GISはQGIS（一般グループ）およびuMap（小中学生グループ）を使用



大判地図への記録



奥のプロジェクトはuMap  
(小中学生グループ)

### 4.グループ発表

各グループが、大判地図およびGISを用いながら、グループリーダー（地域の防災士）が危険地区および危険状況を発表した。



大判地図を使った発表



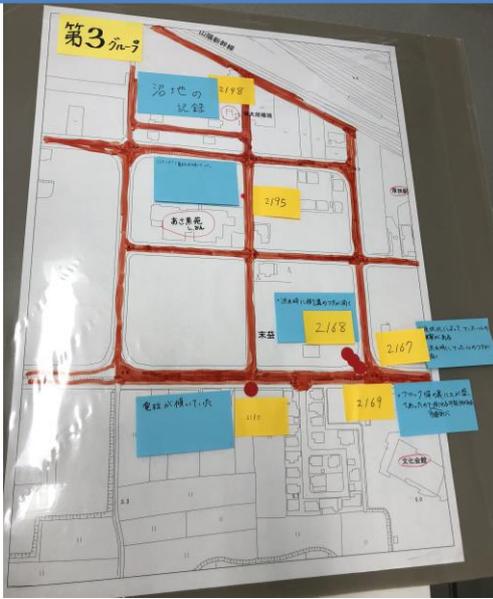
GISと大判地図を使った発表



発表の聴講

## (危険箇所のプロット結果) 大判地図&GIS

### ① 危険箇所を大判地図にプロット

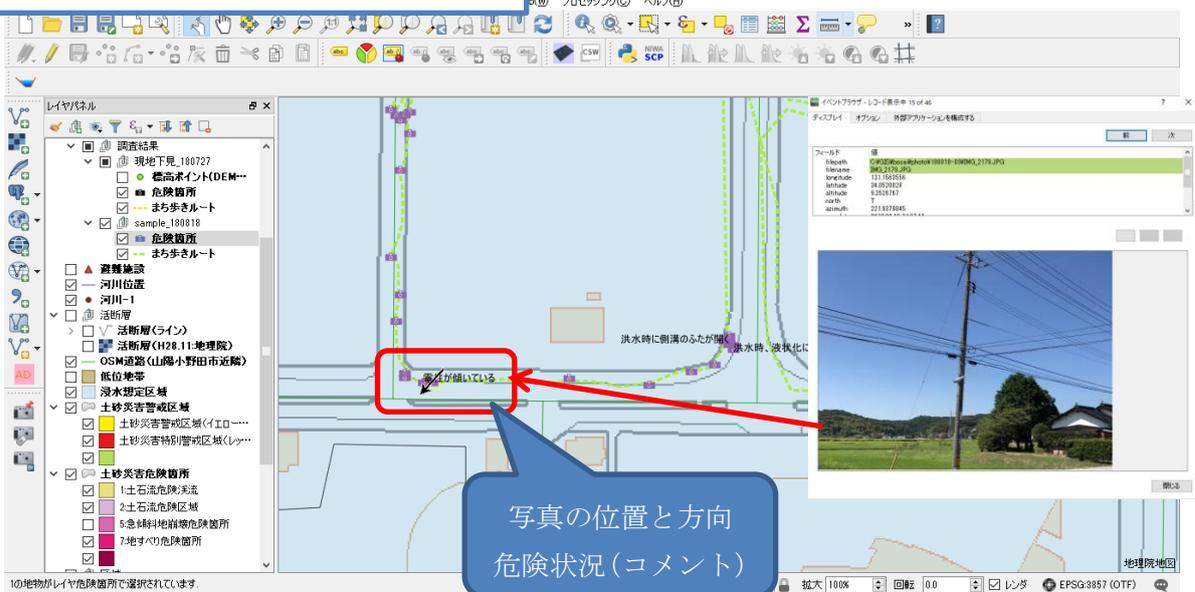


大判地図は、グループ全員で地図情報を確認しながら、危険箇所と危険内容を記録するのに有効であった。

一方、グループ発表では写真の説得力が圧倒的であり、大判地図よりGISを使う方が大半であった。

GISは電子記録が永続的に保存でき、翌年、他地区、他分野（歴史教育、観光など）への展開が行えるのもメリットと言える。

### ② 危険箇所をGIS (QGIS) にプロット



## 【所感】

暑い中、ご参加・ご協力、大変お疲れまでした。一人も怪我なく、事故なく終えたことが何よりでした。

「地域を歩くことで、地域を知る」。少なくとも初の参加となる小中学生、また地域外の方々においては、歩くことで分かったことがたくさんあったようでした。小学校の先生も参加されており「小学生が通学時におく遊ぶ箇所の近くに、災害時の危険箇所があったことがわかり、ためになった」とおっしゃっていました。

一方、地域の防災士さん達にとっては、「DIG（防災図上訓練）は何度も実施しているが GIS は初の取組」とのことで、GIS の有効活用に注目されていましたが、今回の場では GIS そのものの活躍の場は、唯一グループ発表の時（すなわち情報共有）であったようでした。

ただ GIS 本来のメリットは、これらの地域情報をデータベース化し、防災計画の策定（避難ルートや地域ハザードマップ作成）に活用できることです。これにより GIS を共助（自治会、学校単位等）、自助のツールとして活用できることに繋がります。そのためにはこの活動を続けることが重要であり、皆さんの引き続きのご協力を願っております。地域の危険箇所に関する情報収集は足で稼ぐ以外の手段がないためです。被災時にブロック塀破損による人身事故が発生した大阪北部震災のようなことがないよう、準備となる情報収集・整理に GIS が欠かせないものと考えます。

ネックとなる GIS 操作方法については、私どもがサポートしてゆきたいと考えております。10月には GIS 講習会を予定しております。ぜひご参加ください。

最後に、日曜日にもかかわらずご来場くださりました来場者のみなさま、サポートくださった地元の防災士さん達、山陽小野田市の方々、山口東京理科大スタッフ一同、そしてチームスタッフ一同に厚くお礼を申し上げます。

（次ページにて、宇部日報さんの新聞記事（8/20）を参考までに紹介します）。

# 「GIS」で防災地図づくり

## 住民ら危険箇所を点検

地理情報システム(GIS)を活用した電子版ハザードマップづくりの初回として、出合校区の地域住民と山口県立理科大学の学生有志が18日、校区内のブロック別、電柱、橋など危険箇所19カ所を点検した。今後は既成の電子マップに現地の写真や情報を盛り込んでいく。



危険箇所を点検する地域住民ら(出合校区で)

### 出合校区

GISはパソコン上に複数の地理情報を表示するシステム。地域防災に役立つ情報を高めて、ウェブ上で情報の共有、蓄積を促そうと、県民生活でつくる一般社団法人むまぐせGIS広場(三浦慶紀理事長)がマシンの導入を初企画。2010年に厚狭津波被害で被災した出合を、普及も啓蒙の第一歩に進んだ。

案内役の自治会長と防災士の他、GISを学ぶ学生、出合小児童中の子どもたちと保護者40人が参加。4班に分かれ

て地震と豪雨を想定しながら危険箇所をとり、地球測位システム(GPS)端末で正確な位置情報を調べた。

防災士の曾瀬謙さん(72)の班は、県道船木津布田線の栗田交差点近くのエリアにある4カ所を訪れた。参加者は曾瀬さんの助言を聞きながらブロック塀の補強やひび割れ、電柱が倒れそうな位置、橋の高さと川幅を確認。曾瀬さんは「技術を学んで危険の見え方を取り組めたら、県民鉄道君(出合小)等は「危ない場所」に気をつけて通学したり、遊んだりしたい」と話した。

「GISを活用した自助・共助」と題した講話もあった。無償の専用ソフトウエア、自治体の地理データが揃っているため、技術者を指導すれば誰でも活用でき、土地の標高、見守り対象者の自宅を地図的に確認できる利点が紹介された。

同法人理事を務める山口県理科大学の井上啓教授は「学生の協力を得ながら、この活動が出合から市内外に広がれば」と話した。(白星二)

以上